



秋の豆はたき(41.11.4)風景  
(じばん、さらっぱかま、あみがさの農婦仕度)

これに類するものには、もんべともひきがあるが、ここではもんべは野良袴ではなくて、ふだん着の時着ける場合が多い。もひきは、奥会津の山村などにゆくと、山仕事の労働着としてつける場合があるが、この地方では、道中袴か、冬の寒い時の下袴として用い、労働着専用ではない。これに類するものにふんごみたっつけなどがあつたが、現在はよほどの老人でも、もう忘れかけているようである。やや作り方が違ったふんごみは、もんべよりだぶだぶして、冬の綿入れの長着物などを着た場合にはく。たっつけは、膝上はだぶついているが、膝下はさらっぱかまのように細くできている。やはり昔の野良袴か、道中袴に用いたものである。

今では、女は子供から、パンツやズロースを着けない者はないといつてよいほどになっている。これは実に近年のことで、大正の半ば過ぎ、高等女学校などに洋服が普及してきた時、同時に外の半ば過ぎ、腰巻きが、腰下の下着で、それを半分に折って、さらっぱかまをつけていた。しかし、女の、今では外国語で呼ぶ肌袴類は、全く急に外国からはいってきたものには違いないが、さらに古くは、日本の女も肌袴として、これに類するものを着けていた証跡がある。老姿などに聞くと、夏、会津めぐりなどに出る時は、裾をたくり、膝下にはゃはん、わらじを着けたので、肌袴として、ももひきの